

パレスチナ人に対するイスラエルの非人間化：家畜の扱いを超える組織的残虐行為

イスラエルによるパレスチナ人に対する非人間化キャンペーンは、彼らの存在そのものに対する計算された執拗な攻撃であり、家畜以下の地位にまで落とし、制御され、搾取され、消滅される使い捨ての対象として扱っています。ジェノサイド的なレトリック、過酷な行政拘禁、拷問的な収容条件、ガザでの大量虐殺、同意のない医療行為、歴史的に確認された臓器摘出、そしてこれらの犯罪を隠蔽するための遺体の意図的な保留や集団埋葬を通じて、イスラエルは恐るべき精度でパレスチナ人の人間性を剥奪してきました。遺体が検死不能なほど腐敗するまで保留されたり、名前のない集団墓地に埋葬されたりすることは、単なる過失ではなく、残虐行為の証拠を抹消し、イスラエルを責任から守るための邪悪な試みです。このエッセイは、これらの行為が数十年にわたるパレスチナ人抹消プロジェクトに根ざした道徳的かつ法的な忌まわしい行為であり、国際的な非難と正義を要求すると、揺るぎない信念をもって主張します。

ジェノサイド的レトリック：非人間化の基盤

イスラエルの非人間化は、集団意識を毒する言葉から始まり、パレスチナ人を命や尊厳に値しない亜人間の存在に変えます。建国以来、指導者たちはパレスチナ人の存在を否定する言葉を武器にしてきました。1969年のゴルダ・マイアの悪名高い宣言、「パレスチナ人などというものは存在しなかった…彼らは存在しなかった」は、彼らのアイデンティティと歴史を消し去り、彼らを非存在として扱う政策の基礎を築きました（The Language of Genocide）。このレトリックは現代の指導者にも引き継がれ、暴力を正当化するために非人間化を増幅しています。2023年10月以降のベンヤミン・ネタニヤフ首相の演説では、パレスチナ人を聖書のアマレク人に例え、その完全な破壊が神の命令であるとし、彼らを「闇の子供たち」と呼び、殲滅が必要な実存的脅威として描いています（Dehumanising Palestinians）。ヨアヴ・ガラント国防相のぞっとするような主張、「我々は人間の動物と戦っており、それに応じて行動している」は、ガザへの食料、水、電力の遮断を伴う包囲戦を正当化し、パレスチナ人を飢餓に値する獣として明確に位置づけました（In Israel, Rhetoric Dehumanizing Palestinians）。ベザレル・スモトリッチ財務相が「世界はイスラエルが200万人の民間人を飢餓で死なせることを許さない」と嘆いた発言は、大量死を解決策として正常化するジェノサイドの意図を明らかにしています（Israeli Society's Dehumanization）。この言語は市民社会にも浸透し、メディアの人物であるイエフダ・シュレジンガーがパレスチナ人囚人の強姦を擁護し、クネセトの議員が兵士に性的暴力を含む制限を設けるべきでないと主張しています（Israeli Society's Dehumanization）。このようなレトリックは単なる誇張ではなく、残虐行為の意図的な前兆であり、パレスチナ人の苦しみが増え、彼らの命が家畜よりも軽視される文化を生み出しています。

行政拘禁：カフカの深淵

イスラエルの行政拘禁の慣行は、しばしば未成年者を含むパレスチナ人を、起訴、裁判、説明なしに投獄する恐ろしい制御メカニズムであり、人間の尊厳を否定する法的な空白地帯です。国連人権事務所によると、2023年11月時点で9,400人以上のパレスチナ人、数百人の子供を含む人々が拘禁されており、そのうち3,242人以上が行政拘禁されています（UN Report）。被拘禁者は「不法戦闘員法」の下で最長140日間、弁護士や家族との接触を禁じられ、国際赤十字委員会（ICRC）の訪問も禁止され、国際人権規約（ICCPR）および児童の権利に関する条約（CRC）に違反しています（Amnesty International）。家族が愛する者の運命を知らないこの秘密主義は、感覚を持つ存在ではなく、使い捨ての物体として扱うことを反映しています。2024年に延長されたこの法律は、司法の監督なしに拘禁を可能にし、パレスチナ人を声も視界もない存在にします。特に、14歳の少年が24日間拘禁され拷問を受けたような未成年者は、若さを無視され、無期限に閉じ込められるべき脅威として扱われるシステムで特別な恐怖に直面しています（Amnesty International）。有用性のために基本的な世話が施される家畜とは異なり、パレスチナ人はその人格を意図的に抹消され、その存在は官僚的な注釈に還元されます。

拘禁中の拷問的条件：地獄への降下

イスラエルの拘禁施設の状況は、パレスチナ人の非人間化の証であり、被拘禁者を拷問、強姦、放置の悪夢的深淵に突き落とします。アムネスティ・インターナショナル、B'Tselem、国連の報告は恐ろしい光景を描いています。被拘禁者は檻のような囲いの中に閉じ込められ、目隠しされ、手錠をかけられ、オムツを強制され、食料、水、寝具、医療が拒否されています（B'Tselem）。拷問は組織的で、殴打、電気ショック、ウォーターボーディング、天井からの吊るし上げ、犬による攻撃が記録されており、2023年10月以降、少なくとも54人が拘禁中に死亡しています（UN Report）。性的暴力は横行し、集団強姦、消火器のノズルのような物体を使用した強姦、犬による強姦の証言が、特にスデ・テイマンで、国連やニューアラブの報告によって記録されています（New Arab）。女性や子供は特に恐ろしい状況に直面し、衛生用品を拒否され、裸での身体検査を受け、ある看護師は国連の公聴会で強姦による出血を証言しました（RFI）。B'Tselemがこれらの施設を「拷問キャンプ」と呼ぶのはその残虐性を強調し、少なくとも価値を維持するために餌を与えられ、保護される家畜の放置を超えています。対照的に、パレスチナ人は意図的な苦しみに晒され、身体と精神が破壊され、動物がこのような計算された残虐さに耐えることはありません。

ガザでの大量虐殺：展開するジェノサイド

特に2023年10月以降、ガザでのパレスチナ人の大量虐殺は非人間化の恐ろしい頂点であり、アムネスティ・インターナショナルと国連が潜在的ジェノサイドと呼ぶものにより、主に女性と子供を含む53,000人以上が殺されました（Amnesty International）。病院、学校、難民キャンプを標的としたイスラエルの無差別空爆は、パレスチナ人の命への冷酷な無視を反映し、彼らを「人間の動物」とするレトリックで正当化されています。食料、水、医薬品を遮断する包囲戦は飢餓と病気を引き起こし、スモトリッチの発言はこの結果が受け入れられると示唆しています（Israeli Society's Dehumanization）。国連の推定では、ガザの住宅とインフラの70%が破壊され、地域を居住不可能にすることを目指しており、ジュネーブ条約の集団的懲罰の禁止に明確に違反しています（UN Report）。アル・アハリ・バプティスト病院への空爆など、数百

人を殺した具体的な残虐行為は、暴力の規模を強調します（Dehumanising Palestinians）。これは戦争ではなく、害虫として根絶されるべきパレスチナ人を扱う絶滅であり、家畜がこのような無意味な破壊から免れるのとははるかに悪い扱いです。国際司法裁判所（ICJ）は2024年1月の暫定措置でイスラエルにジェノサイドの防止を命じましたが、パレスチナ人の死を正常化する非人間化レトリックに後押しされ、虐殺は続いています（ICJ Ruling）。

同意のない医療行為：身体の神聖性の侵害

イスラエルの医療虐待の疑い—同意や麻酔なしに手続きを行うこと—は、パレスチナ人の身体的完全性をグロテスクに侵害し、彼らの体を搾取の対象として扱います。スデ・テイマンでの手錠による怪我による「日常的な」切断が、劣悪な条件で行われたとの報告は、医療的怠慢、もし意図的な害でなければ、をほのめかしています（2024年4月のCNN報告による）（CNN Report）。同意や麻酔なしで行われたこのような手続きは、ICCPRの非同意医療行為の禁止および拷問禁止条約（CAT）に違反し、拷問または非人道的扱いを構成します。拘禁施設での透明性と医療記録へのアクセスの欠如は、虐待の疑いを増大させます。家畜は有用性を確保するために医療が規制されていますが、パレスチナ人はその尊厳と自主性を無視した手続きに晒され、単なる罰や実験の器としての非人間化された地位を強化しています。

歴史的な臓器摘出と遺体保留による隠蔽

イスラエルの臓器摘出の歴史的承認と、現在の検死不能なほど腐敗するまでパレスチナ人の遺体を保留したり、集団墓地に埋葬する慣行は、凶悪な犯罪を隠蔽する意図を糾弾するものです。2009年、Abu Kabir法医学研究所の元所長であるYehuda Hiss博士は、1990年代に病理学者がパレスチナ人、イスラエル人、外国人労働者の遺体から家族の同意なく角膜、皮膚、心臓弁、骨を摘出したことを認めました（The Guardianによる）（The Guardian）。この承認は、パレスチナ人の遺体が無生物から資源を採取するように搾取され、その神聖性が侵害されたことを確認しました。Euro-Med Human Rights Monitor（2023）の最近の主張では、ガザから返還された遺体に肝臓や腎臓などの臓器が欠けているとされていますが、紛争と腐敗により法医学的証拠が妨げられています（Euro-Med Monitor）。Jadaliyyaによると、370体以上の遺体が意図的に保留され、115体以上がモルグに、256体が「数字の墓地」と呼ばれる番号付きの墓にあり、こうした虐待を明らかにする可能性のある検死を防ぐための計算された戦略です

（Jadaliyya）。2024年8月5日にガザに返還された89体の腐敗した遺体が、ナセル病院近くの集団墓地に識別されずに埋葬されたこと（Al Jazeeraによる）や、2024年9月25日に88体の遺体が認識不能な状態のために受け入れを拒否されたこと（Middle East Eyeによる）は、証拠を抹消するための意図的な努力を示唆しています（Al Jazeera, Middle East Eye）。家畜の遺体は規制監督の下で扱われますが、パレスチナ人の遺体は個性を抹消し、潜在的な犯罪を隠す方法で保留または廃棄され、罪悪感と無罰を叫ぶ慣行です。

法的影響：国際法に対するあからさまな攻撃

イスラエルの行動は、複数の枠組みを無罰で侵害する国際法に対するあからさまな攻撃です： - 国連憲章：人権を求める第1条は、パレスチナ人の尊厳を否定する非人間化政策によって無視さ

れています（UN Charter）。- **ICCPRおよびCAT**：恣意的な拘禁、拷問、同意のない医療行為は第7条および第9条に違反し、臓器摘出は拷問および傷害を構成します（ICCPR, CAT）。- **ジュネーブ条約**：第四条約は拷問、集団的懲罰、死者への不敬を禁止し、ガザ、拘禁慣行、遺体保留で明らかです（Geneva Conventions）。- **ローマ規程**：2024年11月の国際刑事裁判所（ICC）のネタニヤフとガラントに対する戦争犯罪（殺人、拷問、飢餓を含む）の逮捕状は、個人の責任を強調します（ICC Cases）。- **ICJ判決（2024年7月）**：イスラエルの占領を違法と宣言し、恣意的な拘禁や集団的懲罰を含む体系的な違反を引用しました（ICJ Ruling）。- **保護する責任（R2P）**：ジェノサイドおよび人道に対する罪の疑いはグローバルな介入義務を引き起こしますが、政治的同盟が行動を阻害しています（R2P）。- **慣習国際人道法（IHL）**：不必要な苦しみを禁止し、死者の敬意ある扱いを義務付け、イスラエルの慣行によって両方が侵害されています（Customary IHL）。

検死を防ぐための遺体保留は、名誉ある埋葬を要求する第四ジュネーブ条約の第16条および慣習的IHLの敬意ある処分の義務に直接違反します。これらの行為は戦争犯罪、人道に対する罪、そして潜在的ジェノサイドを構成し、訴追、制裁、国際的介入を要求します。

道徳的深淵：家畜よりも悪い

家畜は経済的価値のために餌を与えられ、保護され、その価値を確保するために規制されています。対照的に、パレスチナ人は意図的な抹消キャンペーンに晒され、飢えさせられ、拷問され、虐殺され、搾取され、その遺体は犯罪を隠すために保留または廃棄されます。臓器摘出の歴史的承認と、腐敗するまでの遺体保留の現在の慣行は、責任を回避する恐ろしい意図を明らかにし、パレスチナ人の遺体を敬意に値する人間の命ではなく、抹消される証拠として扱っています。これは単なる見落としではなく、パレスチナ人を忘却の地点まで非人間化し、その苦しみを不可視にし、死を無意味にする体系的な努力です。

結論：正義の要求

イスラエルによるパレスチナ人の非人間化—ジェノサイド的レトリック、行政拘禁、拷問的条件、大量虐殺、医療虐待、歴史的臓器摘出、遺体保留や集団墓地による犯罪の意図的隠蔽を通じて—は、道徳的かつ法的な忌まわしい行為です。それは民を家畜以下の地位に落とし、人類の倫理的基盤を否定する計算された残虐さで扱います。国際社会は断固として行動しなければなりません：包括的制裁を課し、ICCおよびICJの調査を支持し、R2Pを実施し、保留された遺体の即時解放と適切な埋葬を要求します。これを無視することは、民族全体が抹消され、その苦しみが副次的な被害として無視される道徳的深淵を容認することです。世界は、他のジェノサイドに対して要求するのと同じ緊急性でイスラエルの残虐行為に立ち向かい、その人間性が残酷に否定されたパレスチナ人のための正義を確保しなければなりません。

主要引用

- Dehumanising Palestinians
- Amnesty International
- UN Report

- B'Tselem
- Al Jazeera
- Middle East Eye
- Jadaliyya
- The Guardian
- Euro-Med Monitor
- CNN Report
- ICJ Ruling
- ICC Cases
- New Arab
- RFI